

鶇語

り(二十六)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

九五年間、生きてきて その①

中羽立の菅生サンさん(九五)は明治四十三年生まれ。今も時々店番をするという元気なおばあちゃんです。十八歳で大崎から中羽立に嫁入りし、終戦前にはカラフトに住んだことがあるというサンさんに、さまざまなお聞きしました。

氷下漁の時は、朝早くから弁当作り

大崎の漁師たちは冬の氷下漁はやらねもんだつたが、ここに嫁に来た時はちよつとビックリした。男たちは朝早く出るもんだが、女たちはそれよりも早く起きて、にぎり飯をこしえねばいげね。朝の二時前には起きて準備しねば間に合わねもんだが、帯も締めたままで寝だもんだよ。へば、起きればそのまま台所仕事できるんすべ。カマドでご飯炊いて、おひつのふたの上で作った大きなにぎり飯二つ。中には何も入れねよ。それに、ニシンを焼いたおかずなんかも持たせたなあ。その弁当をワラと綿入れなんかで包んで持たせてやれば、昼近くまでホカホカだったよ。んだども、氷下漁は大した疲れる仕事だつて言っていたな。

結婚して三年目、夫は初めての徴兵。兵隊が終わって帰ってきてからも仲間と打たせ船に乗ったり漁師をしたもんだ。そのうち東京で仕事をするとって日立製作所の

試験を受けた。試験は不合格だったども、体が大きくて丈夫そうだったこと、特別に入れてもらったそうです。んだもんだから、私も東京さ行ってな。五年ほど住んだがなあ。そのうち召集されてまた兵隊に行ったども、今度はマラリアにかかって帰ってきた。

マラリアにかかった人は暑い所はダメだ、ということ。今度ではカラフトの炭坑に行くことになったもの。先に行つた夫から『カラフトはいいどころだが、来い』つて言われたども、最初はいやだった。北の外れだんすべ、あそこは…。死に行くのがなと覚悟を決めて行つたども、なんとカラフトは本当に住みやすくいいどころだった(笑)。続く



カラフトでの記念写真。2人の女の子は娘さん。座っているのはお隣りの赤ちゃん。